

放課後等デイサービスにおける知的能力障害を伴う 自閉スペクトラム症児への見本合わせ課題による色弁別指導

短時間個別指導による効果の検討

○小幡知史

鈴木舞

佐藤涼香

渡辺修宏

（樹の子クラブ・常磐大学大学院人間科学研究科）

（樹の子クラブ）

（樹の子クラブ）

（国際医療福祉大学）

KEY WORDS: 放課後等デイサービス, 見本合わせ課題, 自閉スペクトラム症

（目的）

放課後等デイサービス（以下、放デイ）とは、「学校通学中の障害児に対して、放課後や夏休み等の長期休暇中において、生活能力向上のための訓練等を継続的に提供することにより、学校教育と相まって障害児の自立を促進するとともに、放課後等の居場所づくりを推進」する事業である（厚生労働省, 2012）。

放デイ事業所が急増する昨今、支援手法を特化させる事業所が増えている。集団活動を主とする事業所もあれば、個別活動を主とする事業所もあり、放デイ事業所の支援手法は多様となっている。ただし、放デイ事業所に求められる支援手法は、個別活動と集団活動を、その子どもに応じて適宜組み合わせることで提供することである（厚生労働省, 2015）。しかし、集団活動を主とする放デイ事業所の中には、時間や人員、スケジュールなどの制約から、個別活動の実施が困難な事業所も少なくない。

そこで本実践では、特に時間的な制約の点に着目し、短時間で完了する個別活動、すなわち個別指導について検討した。さらに、短時間での個別指導であっても利用児の行動に効果を及ぼすことができるのかどうか検討した。

（方法）

対象者 指導の対象児は、知的能力障害と自閉スペクトラム症と診断された、小学校低学年の男児 A であった。事前に A の保護者および放デイ事業所の職員からの聞き取りによって、A には色の弁別ができない時があるとの情報を得た。

実施場所 指導は、事業所内の一角に設置されたカーテン張りの半個室で実施した。

標的行動 指導における標的行動は、職員が呼称した色の名称に応じて、見本刺激の中からそれに対応する色カードを選択することであった。

手続き 指導は、1 日 1 セッション実施された。また 1 セッションは、8 試行で構成された。1 セッションを 8 試行とした理由は、比較的短時間（5 分以内）で指導が終了できることを考慮したためであった。指導の実施にあたり、まず恣意的見本合わせ課題によるプレアセスメントを行った。プレアセスメントの結果、A は特に「あか」や「あお」といった色の名称と、視覚刺激としての色の対応に難しさを抱えることが示された。そのために第 1 段階の介入（介入①）では、2 つの比較刺激を用いた恣意的見本合わせ課題を実施した。男児 A が正反応を示した場合には言語的賞賛をし、誤反応を示した時には「ざんねん」といった短い言語的フィードバックに加え、正しい色カードのタッピングという視覚的プロンプトを提示した。連続 3 セッションにわたり正反応率が 100% だった時、安定基準を満たしたと判断し、次の介入条件に移行した。介入②では比較刺激を 3 つ用い、介入③では比較刺激を 4 つ用いることとした。比較刺激の数以外は、介入②と介入③ともに、手続きの内容は介入①と同じであった。

倫理的配慮 指導の実施にあたって、事前に保護者の同意を得た。また指導結果の取り扱いについても、保護者の同意を得た。

（結果）

介入は現在も実施中であることから、介入②の第 3 セッションまでのデータ（図 1）をもとに論じる。

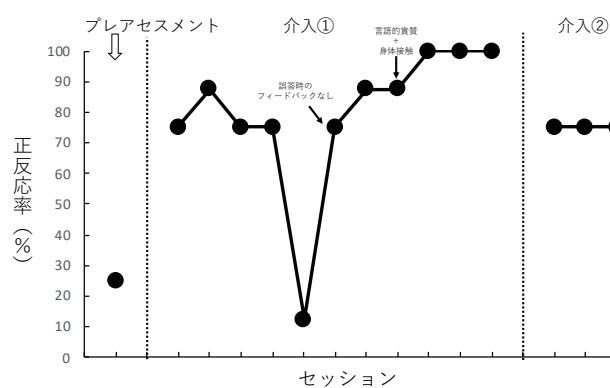


図 1. 色弁別指導における男児 A の正反応率

プレアセスメントの結果、色の名称と対応する色カードの選択行動の正反応率は 25% であった。介入①に移行すると、第 1 セッションで正反応率は 75% にまで増加した。しかし第 5 セッションになると正反応率が急激に減少し 15% となった。この要因として、職員が誤反応時に発していた短い言語的フィードバックが誤反応に随伴する強化子として機能していた可能性が考えられた。そこで、第 6 セッションからは言語的フィードバックを止め、色カードのタッピングという視覚的プロンプトのみにした。すると第 6 セッションの正反応率は 75% に戻った。さらに第 8 セッションからは言語的賞賛に加えて、ハイタッチやくすぐりといった身体接触も正反応に伴って提示した。するとその後のセッションでは正反応率が 100% にまで上がった。次いで介入②に移行すると、正反応率は 75% を維持した。

（考察）

介入②の途中までのデータから、短時間での個別指導であっても、利用児の行動に影響を及ぼすことが示された。この結果は、集団活動を主とした事業所においても、短時間の個別指導を導入することによって、利用児に対してより良い支援ができる可能性を示唆している。しかし一方、介入①の第 1 セッションにおいて、すでに A が高い正反応率を示していたことから、本児が指導の実施前から、色の弁別をある程度はできていた可能性を否定できない。すなわち、プレアセスメントでは、正反応に対して強化子の随伴がなかったために、低い反応率が示したのかもしれない。（OBATA Satoshi, SUZUKI Mai, SATOU Suzuka, WATANABE Nobuhiro）